

われここに立つ

——良心について考える

月本 昭 男

ご紹介いただきました月本昭男です。私は清水正之学長先生とは大学のときに同じクラスでした。その後も、キリスト教系の学生寮で一緒に過ごさせていただきました。

さて、本日の講演は「良心について考える」という副題を掲げましたが、みなさんは「良心」についてお考えになったことがあるでしょうか。「自分には良心がある」と感じたことがあるでしょうか。どんなときに良心というものを感じるでしょうか。友達にうそをついてしまつて、後々「申し訳なかつたな」と思う。そんなときに良心の痛みを覚え、良心がうずくというような経験をなされたかもしれません。

あるいは電車の中で、「お年寄りのために立つてあげたいのだけれど、ちよつと疲れてるのだから」つて、目をつぶつて知らんぷりする。しかし、後で「席を譲つてあげればよかったな」と思うとき、自分の中の良心をお感じになったかもしれません。

私は、群馬県安中市にあります新島学園という中学・高校で学びました。ここにも後輩の方がいらつしやるかもしれませんね。卒業してもう四十八年になるのですけれど、一年ほど前、久しぶりに母校で恩師にお目にかかる機

会がありました。二度ばかりクラス担任をしていた先生ですが、私のことを覚えてくださっていて、「月本君、実は、僕は君に申し訳ないことをしたと思っていて、五十年近くたっているのだけれど、君のことを思い出すたびに良心の呵責を覚えるのだよ」とおっしゃったのです。私は中学時代、野球部でキャッチャーをしていました。ある試合でホームベースにボールが返ってきて、ランナーにタッチしました。審判はそれをアウトと判定しました。しかし実は、私はキャッチャーミットからボールを一瞬こぼしてしまいました。それを相手側が見ていて激しく抗議しました。しかし審判には見えませんでした。私は監督であった先生に呼ばれて、「月本、ボールはこぼれていないと審判に言っただい」と言われました。そして、判定は覆りませんでした。そのことを私は忘れてしまっていたのですが、先生は半世紀にもわたって、私にうそをつかせてしまったことを気にしておられて、「申し訳ないことをした。君の心を傷つけたのではないかと思いつけていたのだよ。今日はそのことを謝りたいと思った」とおっしゃったのです。先生が私のことを五十年近くも覚えていてくださって、「そのことで良心が痛む」と言われたこと、私はむしろそこに深く感激しました。

群馬県の安中市にあります新島学園は、京都の同志社大学の創設者の新島襄の名前から取られております。江戸時代の末期、国禁を犯してアメリカに渡り、明治時代の初めに帰国して同志社を創立した彼は安中藩士の息子でした。NHK大河ドラマ『八重の桜』で、八重の夫として登場してましたからご覧になった方もいらつしやるでしょう。新島は一八九〇年一月に神奈川県の大磯で亡くなるのですけれど、その数カ月前に同志社のある生徒に手紙を書いたためました。その中で彼は「良心の全身に充滿せる丈夫(ますらお)の起こり来たらん事を望んでやまざるなり」と記しました。この言葉は後にひろく知られるようになり、新島襄に関係する学校や施設に刻まれ、「良心碑」と呼ばれています。私はそのような中学・高校で学びましたので、「良心」についてよく聞かされました。また、

哲学者のカントは『実践理性批判』という著書の終りの部分に、「何度も繰り返して長い時間を掛けて考えれば考えるほど、いつも新たなよい強い感嘆と畏敬の念で心を満たすものが二つある。私の上なる星空と、私の内なる道徳法則である」と記しました。この言葉を私に教えてくれた先生は、先ほどの中学時代の野球部の監督の先生でした。「私の内なる道徳法則」、これが「良心」ということに他ならないと知ったのは、新島学園を卒業してからのことです。その良心について、少し皆さんとご一緒に考えさせていたきたいと思います。

最初に、かつては良心のひとつかけらもなかったような人のお話いたします。島秋人という人ですが、初めてお聞きになる方もいらつしやると思います。一九三四年生まれですから、今生きていたら八十一歳になっているはずですが。しかし一九六七年に三十三歳で亡くなりました。死刑に処せられたのです。本名は中村覚と言いました。彼は十一歳のときに母を病気で亡くしました。父親の仕事もうまくいきませんでした。小学校時代の成績はいつも最下位の劣等生。そのために、同級生からはいつも低能児とばかにされました。中学生時代もそれが続きました。高校には進学できませんでした。中学時代からだんだん非行に走るようになりました。そして中学卒業後、仕事についても長続きせず、犯罪に手を染めてゆくのです。最後に、ある家に強盗に押し入り、その主人に大けがを負わせただけでなく、主人をかばおうとした主婦を絞め殺しました。そして金目のものを奪って逃走しました。しばらくして中村覚は強盗殺人犯として警察に捕まりました。裁判にかけられ、それまでもさまざまな犯罪を繰り返しましたので、死刑判決が宣告されました。

こうして中村覚は一九六一年から死刑囚として監獄で暮らすことになりました。その中で自分の過去を振り返ったのです。「悲しい、寂しい人生だったなあ。人からばかにされ、嫌われてきた自分だったなあ」。そういう過去を振り返るなかで、それまでの人生で一度だけ褒められたことを彼は思い出しました。凶工の時間に、自分の絵を見

た先生が「君の絵の構図は素晴らしい」と褒めてくれたのです。それは吉田好道という先生でした。彼は監獄からその先生に手紙を書きます。そして、先生の絵を送ってほしいと頼みました。吉田先生は、卒業して十年以上も経つ自分の教え子の手紙を見て驚きました。しかし、返事を書くことにしました。そして自分の絵と、自分のまだ小さい子どもの描いた絵をその手紙に添えました。

「まさか先生から返事などもらえることなどないだろうと思った」。そう中村さんは振り返っています。さらに、先生の奥様が監獄に訪ねてきました。そして、短歌をたしなんでいた吉田先生の奥様は、中村さんに短歌を書くことを勧め、死刑囚の中村さんは短歌を作り始めました。すると隠れていた才能が開花します。めきめきと上達し、新聞にも投稿し、掲載されました。死刑囚の作った短歌は多くの人に感動を与えました。「島秋人」という歌人としての名前も吉田先生のご夫人が付けてくれたものです。これは「あきと」と読みますけれども、音読みでは「しゅうじん」となります。恐らく死刑囚の囚人と重ね合わせた名前であつたに相違ありません。その短歌のいくつかは、島秋人が処刑されましたから、『遺愛集』という本にまとめられました。

にくまるる死刑囚われが夜の冴えに ほめられし思ひ出を指折り数ふ

手のひらの小さき虫がくすぐりて 死刑囚われに愛を悟らしむ

新聞に投稿された島秋人の短歌に強い衝撃を受けた女子高校生がいました。前坂和子さんといいます。彼女は島秋人に手紙を書きます。囚人として監獄にいたら、美しい花を見ることもないだろう。そう考えて花を贈りました。

いつしか両者の間に美しい友情が、いや、友情というよりも恋愛感情と言つてよいような思いが芽生えていきます。しかし二人が手を取り合つたりすることは許されませんでした。前坂さんが中村さんを監獄に訪ねても、二人の間は厚いガラスで遮られていたからです。島秋人の短歌に心を動かされた女性が他にもいました。宮城県に住まう千葉てる子さんです。彼女は熱心なクリスチャンでした。千葉さんもまた、島秋人に手紙を出しました。そしてその中で聖書やキリスト教信仰の大切さを紹介しました。島秋人は最初、それに反発していたそうです。しかし、次第に心を開くようになり、キリスト教信仰を得て洗礼を受けるに至ります。そして、最後は千葉さんの養子になりました。ですから、千葉寛という名前で処刑されるのです。助命を求める運動もありましたけれども、結局は一九六七年の十一月二日、彼は処刑台に立つことになりました。

この島秋人が死刑囚として収監されていた時期が、ちょうど私が中学、高校生のときと重なっておりますが、彼のことを知ったのは大学入学後のことでした。死刑執行を告げられたとき彼は、それまで世話になった一人ひとり丁寧な手紙を書きました。そして、最後の新聞投稿となる短歌をつづりました。

この澄めるころ在るとは識らず来て 刑死の明日に迫る夜温し

死刑台に上がるとき、東京拘置所の高橋所長に祈りの言葉を残しました。「ねがわくは、精薄や貧しき子らも疎まれず、幼きころよりこの人々に、正しき導きと神の恵みが与えられ、わたくし如き愚かな者の死の後は死刑が廃されても、犯罪なき世の中がうち建てられますように。わたくしにもまして辛き立場にある人々の上にも恵みあらんことを。主イエス・キリストのみ名により アーメン」。

私はこのような、島秋人こと中村覚さんのわずか三十三年の生涯に心が動かされます。死刑が宣告されるまでは良心のひとかけらもなく、周りからあざけられ続けた中村さんでした。しかし、ひとりの先生との交流がきっかけとなり、心の世界が開かれ、心の底に眠っていた良心が目覚めていきました。隠れていた歌人としての能力が発揮され、死刑囚でありながら、監獄で、人の心を打つような短歌の数々を紡ぎ出しました。このことを思うときに、どんな人にも心の底に良心が宿っていることを私は強く感じさせられるのです。先ほどの短歌の「この澄める心」という句には、今まで知らないでいたけれど、良心と呼んでよい自分の心の働きが表現されています。

歌集『遺愛集』は死後出されました。前坂和子さんが非常に努力をされました。島秋人自身は生前、この歌集を出すことを拒んでいたそうです。「自分は大変なことを犯した。その親族もまだ生きている。そんな自分には歌集など出す資格はない」と言っていたと聞いております。この歌集は図書館に備えられていると思いますので、ぜひ一度手に取ってみてください。

ところで、この「良心」という言葉で私が思い起こすのは、ドイツの神学者であり宗教改革者であったマルチン・ルターです。先ほど歌いました賛美歌二六七番の右肩に「マルチン・ルター」と書いてあります。これはルターが作った賛美歌です。ルターは、ほぼ五百年前の一五二七年一〇月三十一日、当時のカトリック教会に対する質問を九五箇条にまとめたものをウイッテンベルクという町の教会の扉に貼って公開質問状としたと伝えられます。それは後の作り話だという歴史家もおり、あるいはそうだったのかもしれない。しかし、九五の提題自体はルターからマインツの司教に送られたものが今日まで伝わっています。そしてそれが宗教改革の扉を開くことになりました。ルターが問題にしたのは、当時のカトリック教会の腐敗でした。教会は大富豪フツガー家から多大な負債があり、それを返済するために贖宥状（しよくゆうじょう）、免罪符とも言われますが、これを発行して資金を集めようと

したのです。死んだ人の魂は天国でもなく、地獄でもなく、その中間の煉獄というところにある。しかし贖宥状を買えば、その瞬間に魂は天国に迎え入れられる。そういう理由を付けて贖宥状が売られるようになったのですけれど、実態は教会による金集めです。しかし、そうしたことはキリスト教が抛って立つ聖書の教えにならなっているだろうか。贖宥状などによって人間の罪は本当に許されるのだろうか。マルチン・ルターはカトリック教会の修道僧として、また、ウイッテンベルクで聖書を教える大学教師として、こうした問題に真剣に取り組みました。そして、「人間が罪を許され救われるのは神の恵みによるのだ。人間がなすべきことは、そのことを心から信ずること以外にない」と確信したルターは贖宥状自体が間違いだと考えました。

そして、このようなルターの意見は多くの信徒に受け入れられ、ドイツを中心にカトリック教会から離れる人々が増えていきます。危機感を募らせたカトリック教会は、教会刷新運動を起こします。それは「対抗宗教改革」などと呼ばれています。危機感としてカトリック教会は活路を海外に求め、海外伝道に乗り出していきます。その働きを担ったひとりがフランシスコ・ザビエルでした。彼はイグナチウス・ロヨラの片腕となつてイエズス会を起こし、東洋伝道の中心人物になりました。そして一五四九年、日本にやつてきたこと、それからキリシタン時代の幕が開くこと、これはみなさんもよくご存じのことでしょう。じつは、ルターの宗教改革は日本のキリシタン宣教とも深く関係していたことになります。

ルターに戻りますと、一五二一年、ウイッテンベルクで九五カ条の提題を公表した四年後、時の神聖ローマ帝国の皇帝カール五世は、ドイツのヴォルムスに帝国議會を招集します。そこにルターは召喚されました。友人たちは、ルター暗殺の陰謀があるから、召還に応じてはならないよ、と説得しました。しかしルターは次のように答えたと言えられています。「私は、たとえヴォルムスに屋根瓦ほどに多い悪魔がいるとしても、そこに入っていくつもりだ。

なぜなら私は驚きも恐れもしていないからだ」。

ヴォルムスで帝国議会に立ったルターの前には、彼の記した書物が積み上げられていました。「これを書いたのはおまえであるか。ここで主張している内容は君の教えであるか、君の考えであるか」と問いただされました。ルターが「そうです」と答えると、「これらの書物に著された君の思想を取り消すつもりはないか」と追及されました。それに対してルターは、「しばらく時間をいただきたい」と答えます。そして再び帝国議会に出頭し、「それらを取り消すつもりはない」と答えました。ルター自身が伝えたその答えにはさらにこのようにあります。

教会や公会議はしばしば過ちを犯した。だから聖書の根拠、または明白な理性によって納得させられない限り、良心に依然として証拠を確信している。私の良心は神の言葉に縛られている。良心に逆らって行動することは確実ではないし正しくもない。それゆえ私は何事も取り消すことはできないし、また、そうしようとは思わない。私はここに立つ。私に他の在り方はない。

ここでルターは「良心」という言葉を繰り返しています。この言葉自体はその前から知られていました。しかしルターは、それまでの「良心」という語にはない意味合いを付け加えました。それまでは、良心とは人間の心の中にある正しいことをしようとする意志とみられていましたけれど、ルターはそうではなくて、神を信じる信仰と切り離せない「良心」、神の前に立つ「良心」をここで主張しました。「良心」は神を信じる信仰に基づくこと、信仰こそが良心を生かす力であること、全ての良い働きの本にこのような信仰の力があること、それらのことをルターは主張したのです。それは、使徒言行録二三章一節に基づいていました。そこには次のように記されています。

「そこで、パウロは最高法院の議員たちを見つめて言った。『兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました』」。

パウロはルターよりもさらに千五百年近くも前の人ですけれども、キリスト教史上、最も偉大な伝道者でありました。新約聖書の中の手紙の多くはパウロが書いたものです。パウロはエルサレムで裁判にかけられた際、「兄弟たちよ、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前に生きてきました」と断言しました。ルターは、ヴオルムスの帝国議会におけるあの堂々とした主張を、「良心に従って神の前に生きてきました」というパウロの発言から引き出したのであります。

「良心」は漢字で「良い心」と書きます。英語では 'conscience'、と言います。最初の 'Con' を取ると「サイエンス」となります。このサイエンスという言葉は聖学院のモットーにもなっているのですね。'Pietas et Scientia' とありますが、'Scientia' という単語を英語に訳すと 'science' です。これは「知識」という意味です。'con' というのは「一緒に」という意味で、英語で言えば 'with'、あるいは 'together' ということになります。'science' というのは 'scientia' の英語形です。現在は、'science'、といえは「自然科学」という意味で使用されることが多いのですが、元の意味は「知ること」です。ですから、「良心」に相当する英語、'conscience' の元来の意味は「共に知ること」です。これは日本語の「良心」とはずいぶんかけ離れた感じがしますね。ちなみに日本語の「良心」という漢字語は中国の古典『孟子』に出てくるのだそうです。

'conscience' が「共に知ること」という意味ですから、自分とは別の人と一緒に感じることができるときの心の働き、苦しんでいる人の苦しみを、自分の苦しみのように感じることができるときの心の働き、そして、喜んでいる人の喜びを、自分の喜びのように感じることでできる心の働き、そのように言ってもよいでしょうか。そして、それらの心

の働きが私たち人間には与えられているのです。他の人がつらくて泣いていれば、なんとなく自分の目が潤んでくる。そういう経験をみなさんもなさるでしょう。アフリカで飢餓に苦しむ子どもたちの痩せこけた写真を見れば、何とかしてあげたい、と思わずにはいられない。

では、私たちがそういう思いを抱くのは、なぜでしょうか。どうして私たちは、他人の立場に立つてものを創造したり、考えたりすることができるのでしょうか。

私は次のように考えます。私たちは、自分は自分、私は私であると考えていますが、実はそうではありません。自分は自分であつて、実はそうではない、という事実があります。自分の心の中をのぞいてみてください。そうすると、そこに自分とは違う人が生きていることに気づきませんか。自分の両親が生きていませんか、兄弟が生きていませんか、友達が生きていませんか、先生が生きていませんか。あるいは、読んで感動した小説の主人公が、登場人物のひとり、自分の中に生きています。そう感じている人は少なくないではありませんか。私は先ほど紹介した島秋人に会ったことはありませんが、彼の残した短歌などを読みますと、自分の中に、島秋人が今も生きていくように思えるのです。

学校教育の場では、「他人の意見ではなくて、君自身の意見を言いなさい」、そんなふうに教えられます。しかし、「私の考え」などといっても、その大半は多くの人から学び取ったものです。今の言葉で言うと「パクった」ものではありませんか。学者の論文だってそうです。「私の考え」では、なんて発表されますけれど、その大半は、実は他の研究者の発表を参考にし、示唆を受け、そこから学び取ったものです。つまり、私たちの心には、じつさい、他の多くの人が生きています。これを逆に考えますと、自分もまた他の人に生きています、他の人の中に生きています。兄弟や姉妹の中に、友達の中に、みなさ

んが生きています。ですから、それぞれ、自分はひとりであるとか、自分は自分だと言いますけれど、実はそうではないのです。自分の中に多くの人が生きていて、今ある「自分」という存在を成り立たせている。そしてまた自分も、多くの人の中に生きています。こういう事態を、私は少し硬い言葉ですが、「人格の相互浸透」と呼びたいと思います。私たちは、それぞれの人と互いに浸透させ合って生きています。だからこそ私たちは、他の人が悲しんでいた、苦しんでいた、苦しんでいたら、自分のことのように受け止める。そういう能力が与えられているのです。人の苦しみを自分の苦しみとして感じ取る能力、共感する力が、ここから生まれてきます。

二〇一一年に起こった東日本大震災は甚大な被害をもたらし、多くの貴重な命が犠牲になりました。私は直接の被災者ではありませんけれど、被災状況を伝えるテレビの画面を見るだけで、何度心を揺さぶられたことか、何度目頭を熱くしたことか、分かりません。昨年、私は仙台市の若林区荒浜という所を訪れました。あれからすでに三年以上が経過し、津波が襲ったときそのままではありませんでしたけれど、雑草が生えて荒れ果てた場所から、多くの人の呻きや、悲しみの声が聞こえるような、そんな思いに駆られました。みなさんもまた、同じような経験を、さまざまになさっているに相違ありません。そのようにして、人はひとりで生きているのではないということを学ばされるのです。

聖書の初めにおかれたエデンの園の物語には、神様は最初の人間を創ったときに、「人がひとりでいるのはよくない」と言われたと記されています。人間はひとりで生きる生き物ではなくて、相互に浸透し合いながら生きていく存在なのだというメッセージがここにも見られます。

他者を思いやり、他者の苦しみを想像する。そういう「良心」という心の働きは、実は小さいころから、私たちの中に育まれています。そのことを私に教えてくれたひとつのエピソードをご紹介します。

「エリザベス・サンダース・ホーム」について聞いたことがありでしょうか。このホームはもともと、日本が太平洋戦争に敗戦してしばらく後に、沢田美喜という方が造った孤児院でした。孤児、つまり両親のいない子どもをそこに預かって育てたのです。敗戦後、日本には占領軍が入ってきました。そして、その米軍の兵士たちと日本人女性たちとの間に多くの子どもが生まれました。しかし兵士の多くはアメリカに帰っていききました。子どもを抱えた女性たちは、その子を育てられなくなつて手放してしまふ。そのようにして親に見捨てられた子どもたちを預かつて、沢田美喜さんは育てたのです。これがエリザベス・サンダース・ホームです。エリザベス・サンダース・ホームは、現在まで児童福祉施設として存続しています。どういう子どもたちが生活しているかといいますと、その多くは、家庭で親に暴力を加えられた子どもたちなのです。このままではきちんとした教育も受けられないし、家庭の生活もできない。そういう子どもたちが、いわば、親から、家庭から救い出されるようにして、この施設にあげられています。

もう十数年前になりますが、私はその施設を訪ねたことがあります。その施設内にはステパノ学園という幼稚園と小学校があります。そのステパノ学園の校長先生からお話を伺つていたときでありました。校長室のドアがちょっと半開きになっており、そのドアの向こうに、行ったり来たりして校長室をのぞいている小さな女の子がおりました。そのことに気づきました校長先生が、その女の子のことを話してくれました。その女の子は、実のお母さんに暴力を振るわれて、そこから助け出されるようにしてエリザベス・サンダース・ホームに連れてこられた少女でした。小学校一年生でした。皆さんとほぼ同じ年齢ですから、今では成人になつているはずですよ。

この子のように親の暴力に遭つた子どもたちは、何よりも、大人を信用しないそうです。それで、いつも大人を試すような行動や発言をする。そうになると、子どもらしい可愛さがなくなつてしまふ。先生方はそのことを知って

いるつもりでも、なかなか、そうした子どもを好きになれない。そこで、子供たちはますます孤独になっていくという悪循環が繰り返される、そうした話を伺っていたのですが、母親の暴力から救い出されるようにして連れてこられたその少女も、大人や先生たちとあまり口をきこうとはしなかったそうです。ところがあるとき、学園の小さなチャペルで校長先生がお話をした後のこと、その少女が先生のところに来て「先生、私のお母ちゃんのために祈りしてください」と言ったそうです。幼い自分に暴力を振るった、できれば忘れてしまいたいような実の母親です。ところが、そのようなお母さんのためにお祈りしてくださいと、小学校一年生になったばかりの少女が先生にお願いしたというのです。

先生は、そのことにとっても驚かされたと言われましたけれど、それを聞いた私のほうがもつと驚かされました。その少女は、言葉では表現できなかったかもしれないけれど、自分に暴力を加えているお母さんがどんなに苦しんでいるのか、そういうことを直感的に知っていたのですね。お母さんの苦しみを想像できていたのです。私はその話を聞いて、改めてその少女の小さな姿を見て、感動を禁じえませんでした。

実は私たちにも、そういう想像力が与えられています。そして、そうした想像力が、喜ぶ人と共に喜び、苦しむ人と共に苦しむ、泣く人と共に泣く、そういう人間らしい行動に私たちを駆り立ててくれるのです。そして、そのような共感や同情の働きのなかにこそ良心の原型がみられるのではないかと私は思うのです。さらに、そのような良心を働かせれば働かせるほど、私たちの人生は豊かにされていくのです。なぜならば、そのとき、相手が私たちの心の中に入り込み、私たち自身がその相手の心の中に入っていくことになるからです。それによって、私たちの心の世界が広がってゆきます。

ここまで良心についてお話しをしてきました。最初に新島襄の言葉、「良心の全身に充満したる丈夫の起こり来

たらん事を望みてやまざるなり」という言葉をご紹介しました。今日的には女子も含め、「良心の全身に充滿したる若者の起り来たらん事を」と言い換える必要があります。この場合の「良心」もまた、単に「良い心」という意味にとどまりません。ここにもまた、神の前に立つ良心、信仰に基づく良心という意味合いが含まれております。新島襄は、「神の前に、愛をもつて誠実に生きることを最も大切にした人でありました。

私たちは、人間関係の中でそのような良心を働かせることができますが、それとは逆に、良心の働きを鈍らせ、これを覆い隠してしまうこともできます。本当は助けてあげたいのに、見て見ぬふりをしてしまう。うそをついてはいけないことは分かっていますが、つい友達を欺いてしまう。しかし、人の前で良心を偽ることができても、神の前で良心を偽ることはできません。なぜなら、目に見えない神は、私たちの心の中で見通しておられるからです。だからこそ、神との関係を受け入れ、神の前に立つ良心こそが、偽りのない良心なのです。鳥秋人の言葉を借りれば、処刑される直前に詠んだあの歌、「この澄める心、澄みきつた心」、それが良心でありましょう。私は今日、みなさんに、「神の前で良心を働かせる人生を送ってみようではないか」、そう語りかけたかと思つてここに伺いました。みなさんはこの聖学院で、キリストの教え、聖書の教えを学んでおられますね。聖書を学ぶとは、究極的には、この良心に基づいた生き方を学ぶということと別ではありません。

最後に、若くして同じく獄死した詩人の詩をご紹介します。「良心」という単語こそは使っていませんけれど、その本質をしつかりと詩に刻み込んだ朝鮮詩人・尹東柱（ユン・トンジュ）の詩です。

彼は一九一七年に生まれ、日本が太平洋戦争に敗北した一九四五年に獄死しました。彼は中国東北部、朝鮮族の出身です。中学まではそこで学び、その後、現在の延世大学（ソウル）で学びました。一九一〇年に日本は朝鮮半島を植民地にしましたが、彼はその植民地で生まれ育ちました。そして、日本で学問を修めるために、一九四二年

から半年間、私が三十三年間勤めておりました立教大学に留学し、その後、同志社大学に移りました。ところが、この尹東柱と彼のいとこは、朝鮮独立運動を煽動し、反日運動を画策したとのかどで、当時の治安維持法によつて逮捕されました。尹東柱は一年半ばかり福岡の監獄に収監され、一九四五年二月一六日に獄死しました。

今年(一九七〇年)は戦後七十年です。日本では「終戦」と言いますが、朝鮮半島の人たちはそれを「解放」と呼んでいることをみなさんはご存じでしょうか。尹東柱は、朝鮮半島が日本の軍国主義から解放される半年前に、祖国の解放を夢見ながら、その解放に立ち会うことなく獄死した人でありました。公式的には病死とされていますが、注目を打たれて殺されたのではないかと申されています。尹東柱の死後、故郷の父親には次のような電報が打たれました。「ヒラヌマトウチュウ、シス、イタイヲトリニコイ」。ヒラヌマトウチュウと記されたのは、当時朝鮮人は、強制的に日本風の名前を付けさせられていたからです。現在では中国領の土地となつた故郷の墓に、尹東柱の亡骸は眠っています。

尹東柱は来日前、自作の詩を集めて一冊の詩集をつくりました。そして友達や先生にそれを預けて日本へ渡つてきました。立教大学時代には、大学の名前が入つた原稿用紙に詩を書き留めました。「たやすく書かれた詩」というものを紹介します。

窓の外には夜の雨がささやき

六畳の部屋はよその国

詩人とは悲しい天命だとは知りつつも

一行の詩でも記してみるか

汗の匂いと愛の香りがほのぬくく漂う
送ってくださいました学費封筒を受け取り

大学ノートを小脇に抱えて

老いた教授の講義を聞きに行く

思い返せば

幼い日の友達ら、ひとり、ふたり、みな亡くしてしまい

私は何を望んで

私はただひとり澱（おり）のように沈んでいるのか

人生は生きがたいものだということに

詩がこれほどたやすく書けるのは恥ずかしいことだ

六畳の部屋はよその国

窓の外では夜の雨がささやいているが

明かりを強めて暗がりを少し押しやり

時代のように来るであろう朝を待つ最後の私

私は私自身に小さな手をさし出し

涙と慰めをこめて握る最初の握手。

この詩が残ったのは、それを故郷の友人に送ったからです。「人生は生きがたいものだということに 詩がこれほ

どたやすく書けるのは恥ずかしいことだ」と歌った彼は天性の詩人でした。その後、同志社大学に移ってから彼は詩を書き続けたと思われませんが、おそらく没取され焼かれてしまったのでしょう、それらは今日に残されていません。彼は、自身の詩集を印刷したいと願っていました。しかし、日本の官憲に捕まってしまうかもしれない、との友人の忠告もあり、それをあきらめ、手書きの私家版の詩集を何部か作成し、先生と友人と友人の手に託したのです。その詩集の冒頭に「序詞」という題名の作品をおきました。

死ぬ日まで天を仰ぎ

一点の恥じ入ることなきを

葉あいにおこる風にさえ

私は心が痛んだ

星をうたう心で

すべて死にゆくものを愛おしまねば

そして私に与えられた道を歩いてゆかねば

今宵も星が風にかすれて泣いている

この詩についての茨木のり子さんという日本の詩人の文章が高校の教科書に載っています。ですから、みなさんの中には、この詩を高校時代に読んだ方もいらっしゃるかもしれません。もちろん尹東柱はハングルで詩を書きましたから、これは訳詩です。この詩が最初に訳されたのは五十年ほど前であり、その翻訳の最初の一文は、「死

ぬ日まで空を仰ぎ 一点の恥なきことを」と訳されていました。しかし、皆さんにお配りした資料では、「天を仰ぎ」となっています。「天」と「空」とはどう違うのでしょうか。ハングルで神様は、古くは「ハヌニム」、今日は「ハナム」と言いますが、これは空とか天を表す「ハヌル」という朝鮮語に由来します。

尹東柱は子どもころからキリスト教徒として育ちましたから、「死ぬ日まで空を仰ぎ」というのは、真っ青な空を仰ぐことではなくて、「天にいます神を仰ぐ」という意味です。ですから「死ぬ日まで天を仰ぎ」には、「天にいます神の前で」という意味が含まれているのです。よって、最近は全て「空を仰ぎ」ではなく「天を仰ぎ」と訳されています。

それから、「全て絶えるものを愛おしまねば」というくだりは、当初、「生きとし生けるものを愛おしまねば」と訳されていました。美しい日本語です。しかし、先ほど紹介した、立教大学時代に書いた詩に、尹東柱は「思い返せば幼い日の友達たち、ひとり、ふたりみな亡くしてしまい 私は何を望んで 私はただひとり おりのように沈んでいるのだろうか」と綴っていました。そうしたことから、この行は「すべて死にゆくもの」、あるいは「すべて絶えるもの」、そう訳されるようになりました。要するに、死ぬ日まで天を仰ぎ、一点の恥じ入ることがない、そういう生き方をしたいというのです。この冒頭の一節には、神の前で、良心に恥じることなく生きようとする詩人の決意が表されています。残念なことに、その生涯は志半ばで終わりを告げました。日本の軍国主義が彼の存在を抹消してしまつたからです。尹東柱は、韓国で、現在最も愛されている詩人と言つていいでしょう。日本においても多くの場所で彼の詩を読む会が開かれています。そうした中で、良心に恥じることなく神の前に歩もうとしたこの詩人の決意は、皆さんのような若い世代にも伝わってゆくことでしようし、また、伝わってゆかなければならないと思わされるのであります。

時代はこれからますます、先行きが不透明になっていくに違いありません。そういう中でみなさんも、卒業後どんな就職をしたらいいのか、どんな道が開かれているのか、いろいろ思い悩まれることも少なくないと思います。そうであればなおさらのこと、私たちもそれぞれに、良心に恥じることなく生きてみようではありませんか。

(二〇一五年十月十四日、「聖学院大学創立記念講演会」講演より)

